

そういう意味からすると、各市町村の財政力は高まりましたから、それはそれで、ある意味で財政面では成功だったというふうに思っています。

ただ、ひずみが出ました。冒頭にも申しましたように、被合併市町村の役場所在地の疲弊は非常に著しい、あるいは公共施設などの身近なサービス施設が合体することによってなくなる、ですからサービスが遠くなるというようなひずみは出てきています。例えば、商工会なども合併すると本来一つになるわけですから、すごく人数が縮小されてしまいます。ところが、そういう状況をどういうふうにかバーするかというのがやはり県の役割だということで、商工会などは支所を置かせて、そして十年間は減少をしない、県単で見ると、十年以降も自然退職が出てきたら埋めないで対応していくというような振興策を併せてつくらざるを得ませんでした。そういうひずみがどうしても出るんだというところの対策が十分に行われてこなかったというところにはやはり平成の大合併の批判が出てきているのではないかと、このように思っています。

倉林明子君 ありがとうございます。

会長（山崎力君） 続きまして、田中茂君。

田中茂君 日本を元気にする会・無所属会、無所属の田中茂といます。よろしくお願いいたします。

今日は、両参考人、大変お忙しい中御出席いただきまして、またお話を拝聴する機会も得まして、大変有り難く思っております。

私、先ほどお話をずっと聞きながら、地方分権道州制、様々なその話の前に、じゃ、自分にとっての地方というのは何なのかと、そう考えたときに、やはり地方というのは私の生まれ育った場所そこは、生まれ育って、じゃ、何を自分に与えてくれるのかと。それはやはりアイデンティティだと思っただけじゃ、そのアイデンティティというのはどこから派生するか。当然ながら原風景、美しい山河、そして四季を通じた風景。で、原体験、それは何かというと、原体験といえば歴史、伝統、文化、その土地の歴史、伝統、文化であると思っただけ。その中で自分の考え、そして先人がまた育ててくれた社会的規範、ソーシャルノームというか、そういうものを得ていくと。共同体生活の中でそれを会得していく。だからこそ、自分たちには自由の気概が出てくる、独立、自尊の気持ちも生まれてくる。私は、そういうのが地方だと思っております。

そういう中で、当然ながら時代の背景が変わっていったら、経済性、効果性を求めていく。ということ、道州制又は地方分権なのか、自立型分権なのか、それは、それぞれの手段として出てくると思っております。

ただ、今言ったようなアイデンティティの生まれる源であるというものを押さえておかない限りは、これは非常にぶれていくんじゃないかと、基本はそこにあるんじゃないかと私は思っております。

そういうことに対する両参考人のお考えはどういうふうな考えでお持ちなのか、お聞かせいただければと思います。

参考人（井戸敏三君） 今、我々兵庫県で大変強調していますのは、ふるさと意識を持つということなんです。それは、今、田中議員が御指摘されたような、基本的なバックボーンを育て上げていかなければならない。兵庫で生まれ育ったということを誇りに持つ、そのことが大事なのではないかと。ただ、これ幾ら観念で言っても会得できませんから、我々としては、学校では体験教育を重視させていただいています。

小学校三年生で環境学習、五年生で自然学校、中学一年生でわくわくオーケストラ、二年生でトライやる・ウィークということ、社会体験、それから高校一年生でボランティア、高校二年生で就業体験、こういう体系的な年代別のふさわしい体験学習コースを用意しているという、これはふるさと意識を持ってもらおうという意味の一つの手段です。

それから、ただそれは生まれ育った人たちだけ

ですけれども、今現在我々兵庫に住んでいる人たち、その人たちを巻き込まなきゃいけない、それでない兵庫の将来がどうなってもいいという話になってしまいますので、自分の住んでいるところをより豊かな、自分たちの望めるような環境にしていくにはどうしたらいいのか。そうすると、自分の住んでいるところを第二のふるさととして意識してもらおうという意味でのふるさと意識の喚起運動を県民運動として展開をさせていただいております。

おっしゃいますように、そういう地域に対する帰属意識をなくしてしまうようなことになってしまつと、それは国も成立しなくなる、世界にも通用しなくなる。やはり帰属意識をきちっと持つた、ふるさと意識を持った人間を育てていきたいというのが我々の基本原則でございます。

参考人（佐々木信夫君） ふるさととは遠くにおいて思うものというところもありまして、ふるさとに住んでいる人の思いと、ふるさとを離れてこつという大都市におられてふるさとを見る思いとは必ずしも同じではないと思つんですが、合併などの議論もそうですが、生活都市、自然都市のようなるふるさと、いわゆる地域と、それから行政上の都市、これは、ある程度合理性を持って公共サービスを提供するためにどうつくくりとかサイズがいいかという話をしている行政都市と、必ずし

もイコールではないんですね。

ですから、生活都市で、こついう野山とかいろんな風景をおっしゃいましたし、私も田舎がありますけれども、こついう風景はなるべく、もちろん壊すわけじゃなくて、記憶にも残るし、こついうところになるべく行ったり来たりするよつな、もつと言えば、住所を二つも置けるよつな形であるべく自然都市というか、こついう自分が育つたところの帰属意識はなるべく強めていく方が、強めていくよつないろんな施策もあつていいし、それは大事だと思つんですね。ただ、それと、例えば区域を広げたとか行政上の合理性のために行政都市を人為的につくつてきているお話とは必ずしもイコールではないと思つんですね。

こつこれから問題は、やっぱり大都市で生まれ育つている人たちが半数以上を占めてきていますので、大都市がいわゆるふるさととして、こついう大都市で育つていく人たちにどういう形で残つていくのかなど。それを、田舎に例えば何とか留学とかいふ形で行つてもらうということも大事ですが、比較的古い話ですと、旧制高校のよつなやり方というのはいいんですね、青春を地方の都市で送るといふ。それは、大都市で生まれよつが何であるよつが、地方の幾つかの旧制高校などで原体験で青春を送つた人というのはいふとこついうところのことを大事にするといふ。ですから、流れ

が地方から大都市へ来るだけじゃなくて、大都市から地方にどういふ形で、ずっと住み着けといふ話ではないんですね、体験をしてみらうよつな仕組みといふものを考えなければいけないんじゃないかなど。

もつと言えば、大手の大学は減反をして各地方に分校を造つた方がいいと。今は逆でありまして、地方会場で全部試験をして地方から人を集めてきて、某中央大学もこつであります、生きていく状況でありまして、これはますますこついう青春は大都市でしか送らない仕組みになつていふ、これが人口減に拍車を掛ける非常に大きな仕組みだと、これは是非皆さん議論をしていただきたいんですが、企業だけじゃないんですね、大学が一番大事だろうと、人を、若者を吸引している、私も責任はありますけれども、答えにならないですかね。

田中茂君 ありがとうございます。

別の角度からちよつと質問させていただきますんですが、先ほどコンパクトシティーのお話がありましたけど、そもそもは高齢化社会に対してコンパクトにまとまつていく、機能を全部そこに集中させると。だけど、先ほどの質問にもちよつと私関連してくるんですが、別にそこには高齢者だけじゃなくて、責、壮、老、全ての人たちが住んでいるわけですね。こついう中で自分たちのアイ

デンティティーというのは築かれていく、そして
きずなも築かれていく、共同体意識が生まれてく
る、そういう非常に大きな話が出てくるわけだと
思っておるんですね。

そういう中で、コンパクトシティーが果たして
どの程度成功していくのか。国土交通省はグラン
ドデザインというところでおっしゃっていますけど、
それは一国土交通省の話では僕はないと思ってい
るんですね。そこには総務省も関係してくるだろ
うし、文科省も関係してくるだろうし、当然なが
ら環境省も出てくる、いろんな省庁が出てそれは
コンパクトさせていくという話になると思っ
たんですね。その辺についてもちよっと御意見をお聞か
せただければ有り難いんですが。

参考人（井戸敏三君） やはり、市町村が中心
になってどういつ自分たちの地域づくりを進めて
いくかということに懸かっているというふうに思
います。市町村として、機能的な連携を重視して
いくのか、それともその機能をできるだけまと
めていくような地域づくりを進めていくのか、
どちらを取るのかという選択の問題だと思いま
す。ただ、今まで高度成長のときでもそういうま
め上げていくという選択をかなり取ってきたはず
ですが、じゃ、それが地域の過疎化を止めるとか
高齢化を止めるとかということにつながったかと
いって、余りつながってこなかったんではないか。

だとすると、今のような人口減少下において、高
度成長期に取ったような同じような発想で、コン
パクトというような発想で進めていくことであら
うかという疑問が私自身はありまし
て、それよりも、今のそれぞれ持っている機能を
補完し合うような仕掛けを考えていった方が現実
的なのではないだろうかというふうにも思ってい
ます。

それから、ふるさとの意識の問題は、大都市の
コミュニティで育った子供たちも十分持ってい
るんですね。震災から復興の過程におきまして、
例えば神戸市などでもお祭りが再開されたんです。
お祭りが再開されただけでコミュニティの横の
連携と力がすごく増しました。つまり、大都市だ
からふるさと意識がないんじゃないかと、大都市だ
からこそ逆に、そこに住んでいるその環境の中で
の地域愛とか、あるいは人と人との結び付きとか
ということをより強く認識した対応が必要になる
ということなのではないか、このように思ってい
ます。

参考人（佐々木信夫君） コンパクトシティー
の話ですけれども、いろいろな、都市的な皆さん
で共通で使う機能をなるべく一か所に集めようと。
それは国交省だけではなくて総務省などもそうい
う考えを進めようとしています。せつかくこう
いう統治機構の話に絡む話ですので、高度経済成

長期に人口が大都市に集中して、その受皿として
郊外にたくさんベッドタウンを造りましたね。こ
れをニュータウンと言ったわけですが、名前だけ
イギリスから持ってきた。ここが実は今崩壊をし
て、大都市圏の郊外からだんだん崩れてくるとい
う問題が一つあるということ。

実は、地方都市でも、ある程度は小都市でもい
いんですが、新たな都心部にニュータウンを造る、
郊外にニュータウンを造るんじゃないかと、郊外に
造ったのは日本の場合にはベッドタウンでしたけれ
ども、都心部にニュータウンを造ると、こういう
新たなニュータウン政策として、人口減社会の、
それをコンパクトシティーという必要はないとは
思っていますが、ニュータウン造りと、そこにある
程度総合的な機能を持って暮らしやすい都市がで
きていくと。

それは別に全部農村までそこに住めという必要
はないんですが、そこから通っていたらいいも
いとして、新たな人口減時代のニュータウン政策
として、都心に、都心というのはこの大都市の都
心ではなくて、地方のある程度のコンパクトシ
ティーと言われるような、該当するようなところに
ニュータウンと言われるようなものを、総合的な
都市づくりをやっていく時代ではないかと。

実は、ベッドタウンがこれから大変皆さん大き
い問題を、シルバータウンになりゴーストタウン

になっていきますので、住民税が入らなく、さらに固定資産税が入らなくなっていったら、郊外の、名古屋も大阪も東京も大都市圏三十キロから五十キロ圏が大きく崩れてくる、こういう時代がもう一方では始まると。これを地方創生の議論ではどういうふうにするのかなというテーマがもう一つございますね。

田中茂君 ありがとうございます。

会長（山崎力君） 主濱了君。

主濱了君 生活の主濱了であります。

井戸参考人、それから佐々木参考人、貴重な御意見誠にありがとうございます。私からも御礼を申し上げたいと思います。

早速質問に入りますが、まず井戸参考人に、国と地方の役割の明確化、こういふ点について伺いたいと思います。これ、先ほどのお話の中に入っておいた件であります。

今、国の方では、第一次から第四次までの一括法が進められておって、さらに今国会では第五次の一括法が今提案をされていると、こういふことであります。

それから、五年ほど前になりますか、これは知事さんもうよく御存じですけども、国の地方機関、これを広域連合に移譲しようとして、こういふたような動きがあったわけですけども、実現に至らなかったということでもあります。この原因